見　本

巻頭論文　Lead article

page 5
「た」発話をおこなう権利
定延利之
Who Can Finish His/Her Sentence with *TA* in Japanese Communication?
Toshiyuki Sadanobu

投稿論文　Research papers

page 31
初級文型を用いた表現教育
――中級レベル口頭表現クラスにおける「ミニドラマ」の実践を通して
遠藤直子
Expressing Ideas Using Elementary Japanese Sentence Patterns through "Mini-drama" Sessions in an Intermediate Oral Expression Class
Naoko Endo

page 49
依頼の接触場面における母語話者の言語調整の特徴
筒井千絵
The Features of Language Adjustment of Native Speakers in Contact Situations of Request
Chie Tsutsui

page 67
ノダの提示方法に関する一案
――メタファーを用いた意味・機能提示
藤城浩子
A Study on How to Present *Noda*:
Presenting meanings and functions by using metaphors
Fujishiro Hiroko

page 85
日常場面における日本語の自己評価に関する一考察
――交換留学生に対するインタビュー調査から
古川敦子
Learners' Self-Assessment of Japanese Language Use in Their Daily Life:
An interview survey for university exchange students
Atsuko Furukawa

page 103
中国語母語話者による漢語サ変動詞のボイス習得研究のための予備的考察
庵　功雄
A Preliminary Study of the Acquisition of Voice in Sino-Japanese Verbs by Japanese Learners Whose L1 is Chinese
Isao Iori

page 119
ドラマにみられる呼びかけ表現の日韓比較
――韓国ドラマ「冬のソナタ」を例に
呉　秀賢
Japanese-Korean Comparison of the Forms of Address Expression Appeared in a Drama:
Korea drama "Winter Song of Love" for an example
Oh SooHyun

page 139
なぜ聞き手を指す「そこのN」は非丁寧になるのか
金井勇人
Why is "*Soko no* noun" Impolite When Referring to a Hearer?
Hayato Kanai

page 157
「だろう」の意味・用法
――小説における分析
キャアコップチャイ　スィラッサナン
The Usages of *Darou*:
Analysis in novels
Siratsanan Kiatkobchai

page 177
変化の程度を表す「大きく」「激しく」について
張　志剛
On the Japanese Adverbial Forms *Ookiku* and *Hageshiku*
Zhang Zhigang

page 187
「まで」と「までに」の肯否体系について
森　篤嗣
On the Japanese Positive/Negative Correspondence System of *Made* and *Madeni*
Atsushi Mori

投稿論文（海外）　Research papers (overseas)

page 207
日本語初級教科書における終助詞「ね」の機能とその中国語訳
熊　鶯
The Function and Chinese Translation of the Sentence-final Particle *NE* Appeared in the Japanese Language Textbook for Elementary Level
Xiong Ying

page 227
習得しやすい日本語複合動詞とは何か？
――香港人中上級日本語学習者の習得及び使用実態予備調査を通して
何　志明
What Kinds of Japanese Compound Verbs are Easy to Learn? :
A preliminary study of the acquisition and usage through examination of Hong Kong intermediate and advanced Japanese language learners
Ho Chi Ming

page 245
小学生向け文章の書き分けの諸相
――携帯電話の取扱説明書を資料に
湯浅千映子
Analysis of the Characteristics of the Expression Targeting Schoolchildren with the Text of the Instruction Manual of the Mobile telephone
Chieko Yuasa

執筆者一覧　page 266
コメント　page 267
日本語／日本語教育研究会規約　page 271
研究発表の募集　page 272
『日本語／日本語教育研究』投稿規定　page 274

中国語母語話者による漢語サ変動詞のボイス習得研究のための予備的考察

庵 功雄

要旨

中国語母語話者は日本語を習得する際、漢語があるため有利になる部分がある。しかし、漢語の知識が負の転移となって習得を阻害する場合もある。本稿では、漢語サ変動詞のボイスを対象に、この問題をアンケート調査に基づいて考察した。その結果、次のようなことが示唆された。

1) 非能格自動詞と他動詞では（正用と誤用の）ゆれが見られないのに対し、非対格自動詞ではゆれが見られる。
2) 非対格自動詞の中にはゆれが見られるものと見られないものがある。
3) 非対格自動詞の他動詞形ではゆれが見られる。
4) 受身にはゆれが見られない。
5) 使役にはゆれが見られ、和語＞サ変動詞、自動詞＞他動詞、という習得のしやすさの差がある。

キーワード

中国語母語話者、ボイス、非対格自動詞、受身、使役

Abstract

Japanese learners whose first language is Chinese have an advantage in learning Japanese because there are Sino-Japanese words. However, the knowledge of Sino-Japanese words may cause negative transference and hinder the acquisition. In this paper, this issue is examined by means of questionnaires. The findings are as follows:

1) *Suru* is consistently selected in the case of unergative and transitive verbs, 2) For unaccusative verbs, there are two types of which one of them is that *sareru* is selected in a relatively high frequency while the other is that only *suru* is selected, 3) there is inconsistency in "transitive form of unaccusative verbs", 4) there is no inconsistency in passive, 5) there is an inconsistency in causative.

Key words

Japanese learners whose L1 is Chinese, voice, unaccusative verbs, passive, causative

A Preliminary Study of the Acquisition of Voice in Sino-Japanese Verbs by Japanese Learners Whose L1 is Chinese

Isao Iori

1 はじめに

中国語母語話者は全ての日本語学習者の中で最多であり、国内の全学習者の過半数に達する[注1]。この意味で、中国語母語話者に対する日本語教育は日本語教育において重要な意味を持つ。

中国語は日本語と漢語を共有しているため、非漢字圏の学習者に比べ有利な点がある。中国語の知識が正の転移として働く場合がこれに当たる。しかし、日本語と中国語の間のさまざまなズレによって、中国語の知識が負の転移になることも考えられる[注2]。本稿ではこの問題について、中国国内の日本語学習者に対するアンケート調査に基づき、漢語サ変動詞によって表されるボイスに関する問題を概観する。

2 問題のありか

上級レベルの学習者（以下、本稿における「学習者」は中国語を母語とする日本語学習者を指すものとする）の作文に次のような誤用がよく見られる（以下（1）～（3）はいずれも一橋大学の上級学習者が書いた文章に見られた実例である）。

（1）*統計という言葉は、国の状態の意味であり、十七世紀に、ドイツで出現された。
（2）*『新編日語』は、［中日］両国の交流が繁盛期を迎える90年代に誕生された。
（3）第二は、［たばこの］税率が高くなると、政府の歳入も高くなる。この部分の税金を肺癌の研究経費に充てて、有効な薬を開発し、医療設備を購入できる。*国民の社会福祉は発展させる。

これらは（広義の）ボイスに関わる誤用と言える[注3]。本稿の目的はこうした誤用がどのような場合に出現しやすいかをアンケート調査によって明らかにすることにある。

3 先行研究

本稿で取り上げる問題については日中両言語における自他のズレという観点から石・王（1984）、中川（2005）などに記述があるが、言語習得という観点から考察したものは管見の限り、庵（2008）以外に見あたらない（韓国語母語話者を対象としたものには澤邊・安井（2008）などがある）。

4 調査の概要

本稿では次のような内容でアンケート調査を行った（調査実施場所は、学習者については中国黒龍江大学で、実施日時は2008年11月であり、日本語母語話者については名古屋大学と一橋大学で、実施日時は2008年12月である）。

4.1 被験者

被験者の概要は次の通りである。

表1 被験者の概要[注4]

母語話者	日本国内の大学（院）生26人	
非母語話者	初級[注5]	黒龍江大学　2年生48人
	中級	同　3年生49人
	上級1	同　4年生48人
	上級2	同　大学院生26人

被調査者に1年生を含めなかったのは、調査時点において受身と使役が未習だったためである。

4.2 調査文

調査文は日中で同形同義になる動名詞[注6]を用いて作成した。同形同義の判断は調査協力者の中国語母語話者（日本語教育専攻の博士課程の大学院生）の内省に

表8を見ると、埋め込み文の述語が自動詞の場合、「させ」以外の回答（回答の「ゆれ」）はサ変の方が和語より多い。

一方、表9を表8と比較すると、和語の他動詞の使役では和語の自動詞の使役よりゆれが大きい。また、サ変の他動詞の使役はサ変の自動詞の使役よりゆれが大きい。

以上のことから使役に関して次のような習得のしやすさの順序があることが示唆される。

（9）自動詞・和語＞他動詞・和語≧自動詞・サ変動詞＞他動詞・サ変動詞

すなわち、和語とサ変動詞ではサ変動詞の場合が、自動詞と他動詞では他動詞の場合が習得しにくいということである。

6 まとめ

本稿では中国語母語話者における漢語サ変動詞のボイスの習得状況をアンケート調査に基づいて考察した。その結果、次のようなことがわかった。

（10）a. 非対格自動詞には「される」をとりにくいタイプと「される」をとりやすいタイプがある。
b. 非能格自動詞と他動詞ではほぼ一貫して「する」が使われる。
c. 非対格自動詞の他動詞形ではゆれが見られる。
d. 和語とサ変動詞の違いによらず、受身の習得率は高い。
e. 使役ではゆれが見られ、その習得率には、和語＞サ変動詞、自動詞＞他動詞という傾向性が見られる。

本稿で取り上げた現象はこれまでほとんど考察の対象となってこなかったものであるが、（10）a～eから明らかなように、同じサ変動詞の中でも学習者にとって習得しやすいものと習得しにくいものがある（母語話者の回答は一貫している）。今後はこれらの現象の実態をさまざまな手段を用いて明らかにしていくことが必要となる。また、その結果に基づいて、これらの項目の効果的な教授法についても考える必要がある。

〈一橋大学〉

〈謝辞〉
本稿をなすに当たって、中国語に関する情報を得る上で劉時珍氏（一橋大学大学院生（博士課程））の全面的な協力を得た。また、改稿に際し、査読者から貴重なコメントをいただいた。いずれも記して、心からの感謝の意を表する。

注

［注1］…… 文化庁（2009）によると、学習者数上位20カ国の学習者数全体に占める中国と台湾の合計の学習者数の割合は54.7%（75,014人）である。

［注2］…… なお、本稿で主張したいことは、中国語話者の誤用の全ての原因が負の転移であるということでも、本稿で扱うような誤用が他言語を母語とする学習者には見られないということでもない。あくまで、中国語話者の誤用の「1つの」要因として考えられる負の転移という現象について本格的に考える前の予備的考察として本稿は位置づけられる。

［注3］…… 本稿では、受身、使役の他に自他もボイスに含めて考える。このようなボイスのとらえ方については野田（1991）を参照されたい。

［注4］……調査の都合上、全てのグループにおいて同等数の被調査者を集めることはできなかった。そのため、データを見る際には「上級2」と「母語話者」の人数が他の3つのグループに比して少ないことに注意されたい。

［注5］……今回の調査では被験者の日本語能力を調査していない。本稿で用いている「初級」「中級」「上級1」「上級2」という名付けはあくまで学習期間に基づく便宜的なものであることをお断りしておく。

［注6］……動名詞の定義については小林（2004）に従う。

［注7］……本稿の主な関心はサ変動詞の自他にあるが、その上で「受身」と「使役」を取り上げる意味は次の通りである。すなわち、5.1から5.4で「される」「させる」の回答を調べているが、学習者が「される」「させる」の最も基本的な用法である受身と使役が習得できているかを5.1から5.4の調査のbase lineとして調べたのが5.5と5.6である。

［注8］……調査時にはこれ以外に「食べる」も用いた。調査文は次の通りである。
［32］私のケーキは弟に（食べました／食べられました／食べさせました）。
しかし、調査後この文は受身と使役の2つの解釈を持つことに気づいたので、ここでは考察の対象から外す。

［注9］……調査時にはこれ以外に「作る、使う」も用いた。調査文は次の通りであるが、

これらは構造的に（能動と使役において）多義であることに気づいたので、ここでは調査対象から外す。

［08］彼はいつも妻に弁当を（作っています／作られています／作らせています）。

［22］彼がパソコンが壊れたと言うので、私のを（使いました／使われました／使わせました）。

参考文献

庵功雄（2008）「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.47–63. 一橋大学

影山太郎（1996）『動詞意味論』ひつじ書房

小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房

澤邊裕子・安井朱美（2008）「韓国人学習者の日本語漢語動詞の習得に関する一考察」『第二言語としての日本語の習得研究』pp.141–159. 第二言語習得研究会

石堅・王建康（1984）「日中同形語の文法的ずれ」中川正之・荒川清秀（編）『日本語と中国語の対照研究　別冊―日文中訳の諸問題』pp.57–82. 日中語対照研究会

中川正之（2005）『漢語からみえる世界と世間』岩波書店

野田尚史（1991）「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』pp.211–232. くろしお出版

文化庁（2009）『平成20年度国内の日本語教育の概要』

査読者一覧

庵 功雄（いおり いさお）
一橋大学国際教育センター准教授

石黒 圭（いしぐろ けい）
一橋大学国際教育センター准教授

井上 優（いのうえ まさる）
国立国語研究所教授

岩田一成（いわた かずなり）
広島市立大学国際学部講師

金井勇人（かない はやと）
埼玉大学国際交流センター助教

川口義一（かわぐち よしかず）
早稲田大学大学院日本語教育研究科教授

佐藤琢三（さとう たくぞう）
学習院女子大学国際文化交流学部教授

田中 寛（たなか ひろし）
大東文化大学外国語学部教授

長谷川守寿（はせがわ もりひさ）
首都大学東京オープンユニバーシティ准教授

前田直子（まえだ なおこ）
学習院大学文学部教授

森 篤嗣（もり あつし）
国立国語研究所助教

研究会役員

［代表代行］前田直子

［大会委員長］前田直子

［編集委員長］庵 功雄

［会計監査］庵 功雄

編集後記

2010年春、日本語／日本語教育研究会による『日本語／日本語教育研究』が創刊の運びとなりました。このプロジェクトは、「日本語学と日本語教育の新しい雑誌を刊行しよう」「そこには萌芽的な研究や大学院生の先端的な研究、非母語話者研究者の論文を積極的に掲載しよう」というところからスタートしました。ここに至るまでには、多くの方々から力強いご支援をいただきました。本誌刊行だけでなく研究会の事務局まで引き受けてくださったココ出版の吉峰晃一朗さん・田中哲哉さん、第1回研究大会の会場校をお受けくださった学習院女子大学の佐藤琢三先生、そして雑誌論文の査読者の方々。皆様の熱意あるご協力に対し、心よりお礼申し上げます。本研究会も本誌も、それ自体がまさに萌芽的な存在です。これからも、本研究会と本誌に関心を持ってくださる方々のご参加をお待ちしております。本誌の創刊に際しては、尚友倶楽部より刊行助成をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。〈前田直子〉

日本語／日本語教育研究［1］ 2010

2010年5月21日 初版第1刷発行

［編者］日本語／日本語教育研究会

［発行者］吉峰晃一朗・田中哲哉

［発行所］株式会社ココ出版
〒162-0828
東京都新宿区袋町25-30-107
電話 03-3269-5438
ファックス 03-3269-5438

［装丁・組版設計］長田年伸

［印刷・製本］モリモト印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN 978-4-904595-07-7
© Association of Japanese Language and Japanese Language Teaching
Printed in Japan